第三十七回ハイドンの個人様式をめぐって ― 生涯と交響曲様式の変遷（2022.12.25）

◎ハイドンの個人様式

Point 1. : ハイドンの人と作品についてのイメージを挙げてみよう。

「職人的」、「論理的」、「形式重視」、「努力家？天才肌？」、「ユーモラス？生真面目？」、「交響曲の父」、「器楽の作曲家」、「ソナタ形式を確立？」・・・・・

◎ハイドンの生涯

1732 年、当時ハンガリー王国領との国境に位置したニーダーエスターライヒ州ローラウ村に生まれた。ローラウはハラハ家の館がある地であり、父のマティアスはハラハ伯爵に仕える車大工、母も伯爵に仕える料理女だった。叔父でハインブルク・アン・デア・ドナウの音楽学校の校長をしていたマティアス・フランクに音楽の才能を認められ、6 歳のときにフランクのもとで音楽の勉強を始めた。

1740 年、ウィーンのシュテファン大聖堂のゲオルク・フォン・ロイターに才能を認められ、ウィーンに住むようになり、聖歌隊の一員として 9 年間働いた。

1750 年頃から、ミヒャエル教会付近の建物の屋根裏で自活するようになり、教会の歌手をつとめたり、ヴァイオリンやオルガンを演奏したり、セレナーデ弾きの仕事も行いながら、本格的に作曲の勉強を始めた。特に、カール・フィリップ・エマヌエル・バッハから大きな影響を受けた。

1757 年頃、ボヘミアのルカヴィツに住むカール・モルツィン伯爵の宮廷楽長の職に就いた。ここで最初の交響曲である交響曲第 1 番が書かれ、約 15 曲の交響曲、鍵盤楽器のためのソナタや三重奏曲、ディヴェルティメント、協奏曲、弦楽三重奏曲、管楽器のためのパルティータなどを作曲された。

1760 年、マリア・アンナ・ケラーと結婚し、楽長としての地位を保持することになる。

1761 年、西部ハンガリー有数の大貴族、エステルハージ家の副楽長となる。エステルハージ家の当主パウル・アントン公はハイドンが雇用されて 1 年もたたずに没し、ハイドンはその弟のニコラウス公に仕えることになった。当時のエステルハージ家の楽団は全員で 14 人しかいなかったが（楽長・副楽長を除く）、ハイドンは楽団の拡充につとめるとともに副楽長時代に、第 6 番『朝』、第 7 番『昼』、第 8 番『夕（晩）』の三部作や第 31 番『ホルン信号』などを含む、約 26 曲の交響曲を作曲した。

グレゴール・ヨーゼフ・ヴェルナーが 1766 年に死去した後、ハイドンは楽長に昇進した。

彼は 30 年近くもの間エステルハージ家で働き、数多くの作品を作曲した。1760 年代後半から 1770 年代はじめにかけて、ハイドンは短調を多用し、実験的ともいえる多彩な技法を駆使する一時期があり、ハイドンの「（ロマン的）危機」、ハイドンの「シュトゥルム・ウント・ドラング（疾風怒濤）」期と呼ばれている。交響曲第 26 番、第 35 番、第 38 番『こだま（エコー）』～第 52 番（第 40 番を除く）、第 58 番、第 59 番『火事』、第 65 番や、作品 9、作品 17、作品 20 の弦楽四重奏曲、ピアノソナタ第 20 番などがこの時代に属する。1770 年代後半にはより簡明な作風に変化した。

1780 年ごろにはエステルハージ家の外でもハイドンの人気は上がり、徐々にエステルハージ家以外のために書いた曲が増えていった。1785 年から翌年にかけてはフランスからの注文で『パリ交響曲』（第 82 番『熊』～第 87 番）を作曲したが、これがエステルハージ家以外の楽団のために書かれた最初の交響曲だった。1785 年にはスペインからの注文によって、管弦楽曲『十字架上のキリストの最後の 7 つの言葉』が作曲された。

1781 年頃、ハイドンはモーツァルトと親しくなった。2 人は互いの技量に尊敬を抱き、モーツァルトが 1791 年に死去するまで友情は変わらず続いた。

1790 年、エステルハージ家のニコラウス侯爵が死去。その後継者アントン・エステルハージ侯爵は音楽に全くと言っていいほど関心を示さず、ハイドンを年金暮らしにさせたが、これによって、ハイドンは、自由に曲を書く機会が与えられながら、同時に安定した収入も得られることになった。同年末にはロンドンの興行主ヨハン・ペーター・ザーロモンの招きにより、イギリスに渡って新しい交響曲とオペラを上演することになった。

1791 年 1 月から 1792 年 6 月、および 1794 年から 1795 年のイギリス訪問は大成功を収めた。このイギリス訪問の間に、第 94 番『驚愕』、第 100 番『軍隊』、第 103 番『太鼓連打』、第 104 番『ロンドン』の各交響曲、弦楽四重奏曲第 74 番（第 59 番）『騎士』やピアノ三重奏曲第 25 番『ジプシーロンド』など、ハイドンの最も有名な作品の数々が作曲されている。

ハイドンは最初のイギリス訪問の際にボンに立ち寄っており、そこでベートーヴェンに出会い、ベートーヴェンに弟子としてウィーンに来るよう約束した。

ロンドン旅行中の 1794 年にエステルハージ家ではニコラウス 2 世が当主になり、ふたたび楽団を再建しようとしたため、ハイドンは改めてエステルハージ家の楽長に就任したが、ハイドンは、ほとんどウィーンから離れることはなかった。

ニコラウス 2 世は古い形式の宗教曲を好み、ハイドンは毎年ミサ曲を作曲した。1796 年から 1802 年にかけて作曲したミサ曲はハイドンの後期六大ミサと呼ばれる。また、オラトリオ『天地創造』と『四季』も作曲し成功を収めた。1797 年 1 月には『神よ、皇帝フランツを守り給え』を作曲し、この曲は 2 月 12 日に国歌として制定された。器楽曲では『トランペット協奏曲 変ホ長調』のほか、『エルデーディ四重奏曲 作品 76』（『五度』、『皇帝』、『日の出』など）、『ロプコヴィッツ四重奏曲 作品 77』を作曲している。

1802 年、ハイドンの持病は悪化した。1803 年には、弦楽四重奏曲としては最後の作品となる第 83 番を作曲したが、1806 年に未完成のまま出版された。

1809 年 5 月 31 日、ハイドンは 77 歳で死去した。葬儀は翌 6 月 1 日に行われ、ウィーンのフントシュトルム墓地に葬られた。

DVD鑑賞：Man and Music「ハイドンとエステルハージ家」

◎ハイドンの交響曲様式の変遷・・・・・六つの時期

Point 2.：ハイドンの交響曲の作品様式の変化を知ろう！

1757年～1761年　　モリツイン伯爵　　＜前古典派的様式＞

1～5番　　※編成：弦楽＋オーボエ2、ホルン2

1761年～1765年　　エステルハージ家　　＜バロック・コンチェルトグロッソ様式＞

6～8番

♪ 7番『昼』　（ミラン・トゥルコヴィ指揮、ウィーン・コンツェルト・フェライン）

1765年～1774年　　エステルハージ家　　＜シュトルム・ウント・ドランク様式＞

34番　35番　39番　44番　45番　49番　52番　　※7曲の短調交響曲

♪ 45番『告別』　（アンサンブル・レザグレマン）

1775年～1784年　　エステルハージ家　　＜劇場的・大衆的・娯楽的様式＞

61～81番　　※四楽章構成へ

♪ 73番『狩』　（ヤープ・ヴァン・ズヴェーデン指揮、オランダ放送室内フィル）

1785年～1789年　　エステルハージ家以外の依頼　　＜ハイドンの交響曲様式　完成期＞

※楽想・主題労作・（対位法的）有機的楽曲構造・編成などの充実

82～87番　『パリ交響曲』

♪ 85番『王妃』　（ミラン・トゥルコヴィ指揮、ウィーン・コンツェルト・フェライン）

90～92番　※室内楽的試み

♪ 92番『オックスフォード』　（サイモン・ラトル指揮、ベルリン・フィル）

1791年～1795年　　ロンドンでの演奏会　　＜ハイドンの交響曲様式　円熟と発展＞

99～104番　『ザロモン交響曲』　　※二管編成へ（弦楽＋フルート2、クラリネット2）

♪ 104番『ロンドン』　（ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮、ベルリン・フィル）

◎ハイドンの交響曲の作品様式の理解に向けて

Point 3. : 「交響曲」・「ソナタ形式」・「主題労作」のおさらい

・ハイドンと同じ時期に交響曲を作曲した J.C.バッハのシンフォニーにみられる「ソナタ形式」
　第一、第二主題の対比、提示部・展開部・再現部の原型
・ハイドンの「ソナタ形式」
　第一、第二主題の二元的対比～動機の「主題労作」

Point 4. : 楽曲分析：ハイドン作曲／交響曲 45 番「告別」第 1 楽章、第 4 楽章
ハイドン作曲／協奏交響曲（交響曲105番）第1楽章

◎ハイドンの交響曲の作品様式の理解と演奏解釈